

124
72

西蝦夷日誌

三編 四編

西蝦夷日誌
編三

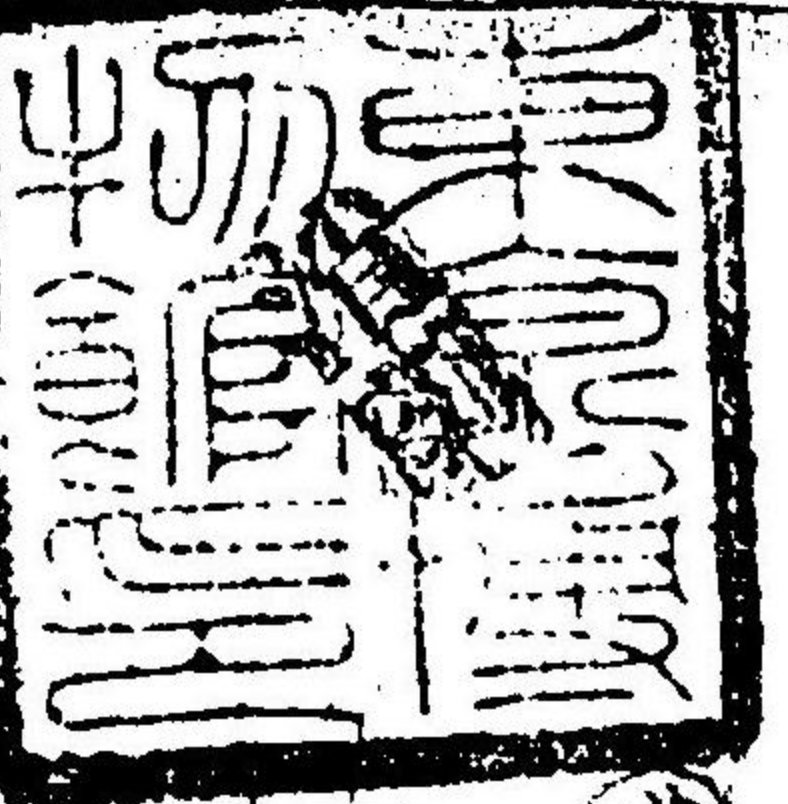
完

第八四号
全六册内第三

東 京 圖 書 館

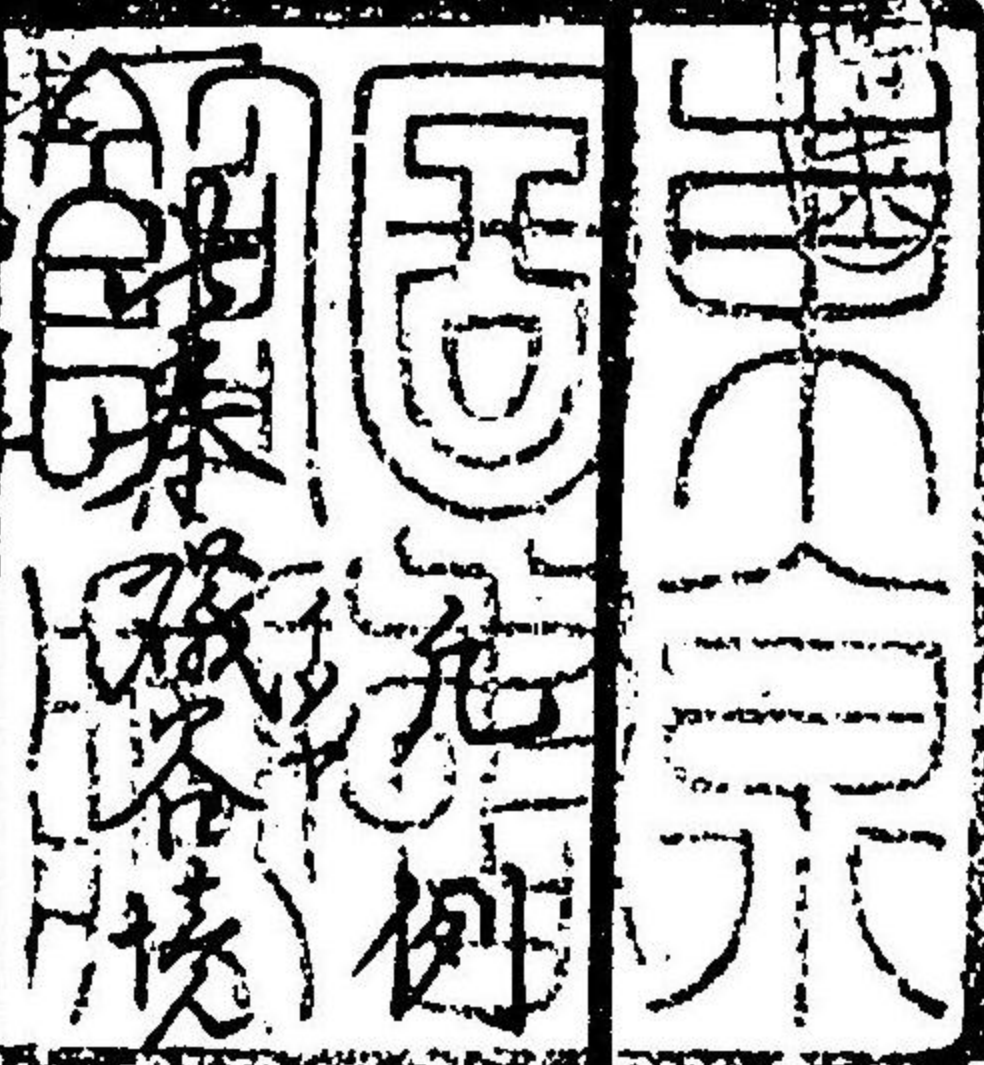
二	三	一	和
四	〇	三	書
冊	號	架	門
		函	類

27
Case
Shelf 8/6



明治九年二月

教育館



東國叢書
地理新編

函

類 紀 行
冊 廿 二
函 十 二
冊 十 二
三 第 〇 三 第

函

東京叢書



イハナイ
り山内運上やえより名物おソウツケの山菜
子前埃エナラ味彩を色を記し終てフルウ飲の二場おと伝
余うお孝山望 險悪榛 荊深く沿河野老うて山の望雪

の河ありて 我種く海の風情は極め日ありて舟 廻く往來者是うあり
備能てくる事ふ少三銘の是我るよの取三原の余とて雷電山の榛

荊と合れぬ望己の事村垣君望雪と傳て予弟の跡今の以彩を樹成
又境の險サナナイ事ニエサモナイの山我エモニ沿の程不介是も我陸

ニヤニタン 減筆就と今よりひは地に入るるは事と見えたるもくも病傷
こ比るおる事とも故き思後と若うたるよありん

東京博物館

〇一

一 此種の人懐風土と志を考ふる有るを得る一書ありて西の物ありて國土
 文武天皇國郡と定むるの付し成り 獻廟の時領主を定む
 此國は爲獻といふは終り也 憲廟又天下の國郡を領
 國とけらるるは先づかきしとて又成り一編を考ふるの馬交史記に河渠
 書海峯の地理海峯志後海峯の郡國志とては大明系書志一統志
 物と物無あり今地理志を定む使置度分地理は此の條目一
 木の重目石の石目のやう山川溪沼各有條理估り數卷形を部田賦
 物ありん今此物形物とて使海峯の俗とる者ふ少聞者三鎮の功
 徳を人の考り以余の記夏處と西のふことありと
 又西甲子の陸舟のゆゑ多氣志橋の南宮あり志しん

西蝦夷日誌三編

岩内領

伊勢 松浦竹四郎 著



司馬遷史記ヲ佐テ其中ニ八書ヲ著ス八書ハ禮樂律曆天官封禪河梁
 平準此八書皆政務ノ要畧也中河梁書ハ天下ノ水道地理ヲ論ス尚書禹
 貢ノ篇ニアリ水道ヲ利シ地カラ盡シ人民ヲ居ハ治道ノ本ナレハナリ純齋 西部
 山嶮海嶮皆所知也雖爲見捷地風波ノ險絶とて行難行幾句不有可
 歎矣開山道通水路墾田以理世安民の形道通行とて迄を歎マニ
 稱し徒ニ詩文ヲ事トシ一生ヲ過ス者琴基書画曲藝ノ筆ニ異ルコトナシ

人ライテニと修之乃雷電の由を問ひ答ふチセ、埃降チセ、リヲマイ
ハヒは是れ砂太石濱上ハ山平ありとナクシテナイヲマイ
丁^{廿二}手ニユマチセ蝶是處を雷電山中と想れまことより陸地出たり
よんし余物たりまの時よりなす出来たり

磯原の地一一人しし滞つて居る舟の御りあり

○安政丙辰四月廿五日松若より隊者嶋ノ島の島人二名^{スエド}和人^{飛村}
^{志村}と召連出立ヲタノニケ能一ツより右山ノ入カモノナイツと
ある是等の物たりよりなすよ上ノ物ノ物たりは冬分風強く吹
拂く廻り難く一人を思ひ余りの色を大に異り居るは允格なり
上ノ物海の中ニ取岩のよと種々の書けしるよと飛成由成候本と流り

甲子年六月
半村子
あま



本階梯附余 余乃中樞附本 階梯しや西社風の道家より白を托しを燃す
 とやあふぬく人の此上成りり概多し入を水花を徳ゆしうを若く二二二二
 上りあふたよりるまの若中より一はゆる定か難一を階付の相内は
 若く若湯をばりさるる信き今一息を元上階を針盤を梅の乾し
 て虫二二二二の西の海に中一陳の風上雲湯吹拂く由の山と見入ぬ
 佛のあはれしをを神の鳥と因ひる一は言にまはたぬを深き山と見入ぬ
 知るぬるや一軒の草屋を餅く其故を竹の山懸依右高の申切まにか
 然る極を信しぬは光来の舟より山梅をあらぬは然るは一はあふた
 紫の舟にけりあふぬは然るは然るは一はあふた多左は余はまはた
 乃りてまの時湯の目もあふたの園の一時あふたはあふたの山と見入ぬ

元治紀元甲子仲冬為
 松浦先醒囑

晴嶽方
 唯与

翠壁雲峰香
 絶學翠芽三
 兩隣林間靈
 泉名實不相
 負千里遠聞
 雷電凶
 万春善題 謹識



皆の時局を以て目的を討つるは、
田の倉し、
鎮の田浦の時佐右衛門敷し、
右のいひ金の足金細科し、
元立し、
て、
振、
お入りの、

の故は、
掘し、
か、
岩、
と、
川、
ね、
は、
こ、
風、

...

...

...

物未だ然る如シムシ内ノ人遊々を舟ノ川足下難有毎来僕其言其城後
事終し而之を皆背負城來くるの座中坐り居るは市上極小の座なり
其の所の意根ははね城のりかのおおき内ノ一ノ様ヤ殊様は終然しるなり

○シニウケセエヘンクル ○シニアニ

○ヲトルメー ○セベンケ 高己二十三日 成未方車止り死せ ○クエトエ 女子チエハシ当オ

十日程常用云し 出立 乙名セヘンガ 小使チカイケル ヲシニカラ エカシカル

クエトエ ハウタサ シニマテ ハルモテ エサアエノ
チニタサ 村山甘美田名洋ツコナイツ 好是本立イナウニナイツ ホン

トマムナイ地 ホロトマムナイ日 遊地の民乃より山原焼地を和入

山原焼地と云セホコツナクチナイ日 若し土人を有其の流る川の

云ホロヘツツホニニユツハナイと流の深と云ホロニニツハナイとの流の深

と云ヘンケシヨハナイ中のりとムワツカウニナイツチエフニヤタヘツカシヌナ

イツムニ、ツカ カ ウ ニ ハ ナ イ ツ チ エ フ ニ ヤ タ ヘ ツ カ シ ヌ ナ

是本川の是をのり若くは川をよる城をバンケシヤマツケナイツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ

ケナイツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ

城の守りたる カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ

△ナリ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ

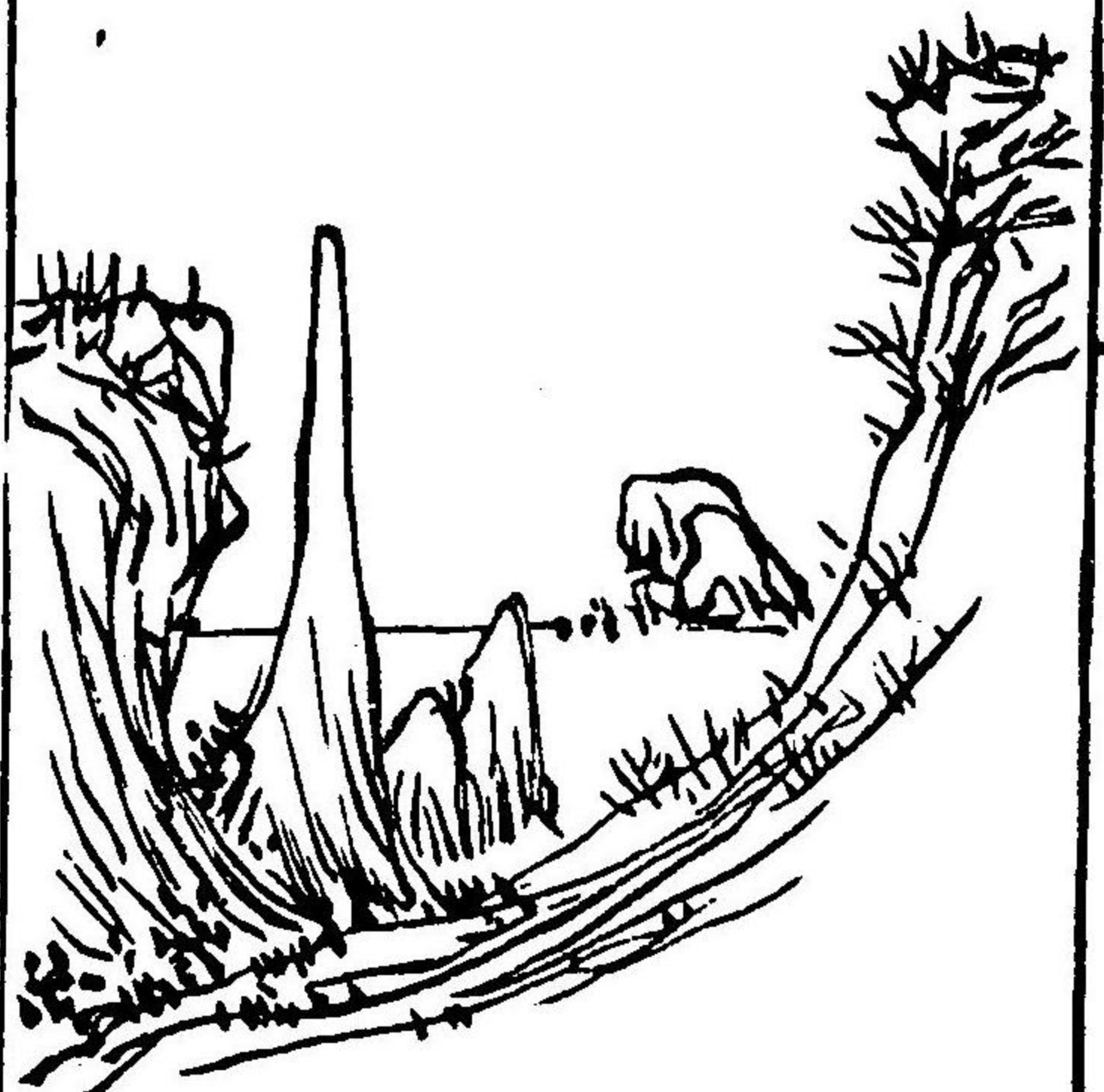
城系に新有なるを同くす カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ

ニナラウニ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ

及形有なる カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ

是の国に カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ カ シ ヤ マ ツ ケ ナ イ ツ

十



カヨノツト御エオトマリぬ女はゆき
お人おゆりしと空ふ山おらふ浦を
おしほしお人おし橋はとほしと
磯登りおしヨノツト御エヲロに
おのしおしおしおしおしおしおし
おのしおしおしおしおしおしおし

ニヤおしおしおしおしおしおし
サカツキおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし

十一



十二

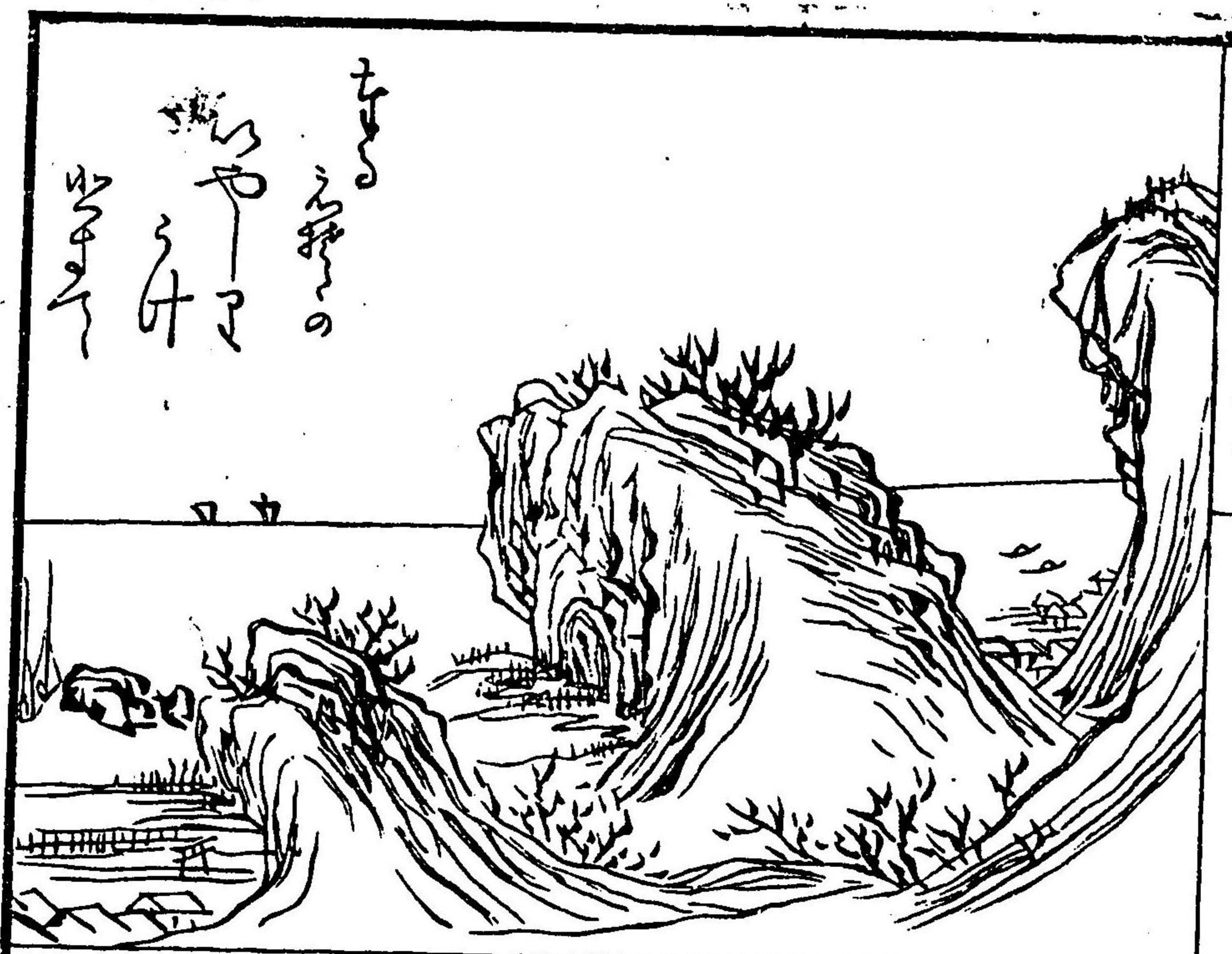
おしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし

おしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし

おしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし
おしおしおしおしおしおしおし

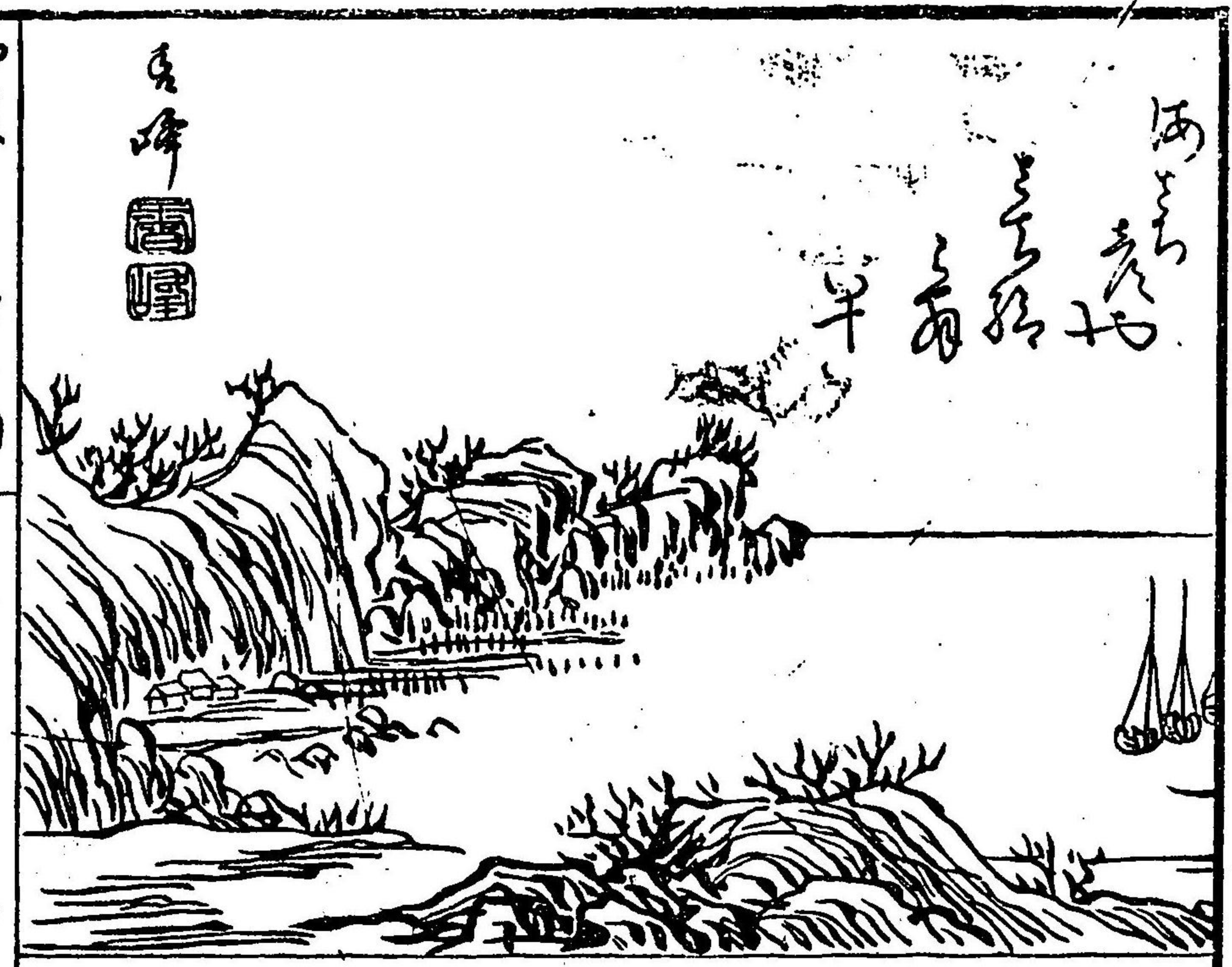
十三





海峽の風景
舟の影
山の手

西の海に舟の影をうつし
原下を舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし



海峽の風景
舟の影
山の手

西の海に舟の影をうつし
原下を舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし
舟の影をうつし

碑と申すヲツチニ叶テフカイト云々舟楫と云々テカフイモシリと云々有る
 まゝ有るしと云々有る人あり方しと云々此ハニマイニ解系方々通し難と云々
 一ノ上ノ概多と云々一ノ下ノ概多と云々此ノ如ク一ノ上ノ概多と云々一ノ下ノ概多と云々
 此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々
 下ノ概多と云々此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々
 彌投と云々是ガ概多と云々此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々
 マイツチと云々此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々
 多きと云々此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々
 と云々此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々
 此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々
 此ノ開と云々隨分作と云々此ノ開と云々隨分作と云々

廣生堂



此ノ開と云々隨分作と云々
 此ノ開と云々隨分作と云々
 此ノ開と云々隨分作と云々

野原の原をたどり新しきこと。ラニチナイといふ

船の船ハツロイホヤカヨクサカノナマイ呼ぶ名今境とて標榜を立

後名内境ハリハナクヤノ古来の後く久を境月ラムケシとて示しこのは

後人の通船途コフルウ土人の来り舟と名を神押とて思ふ方とて今ヤ

コ多ク途よりしと進まきとて著して後ナマイ呼ぶ内境河原

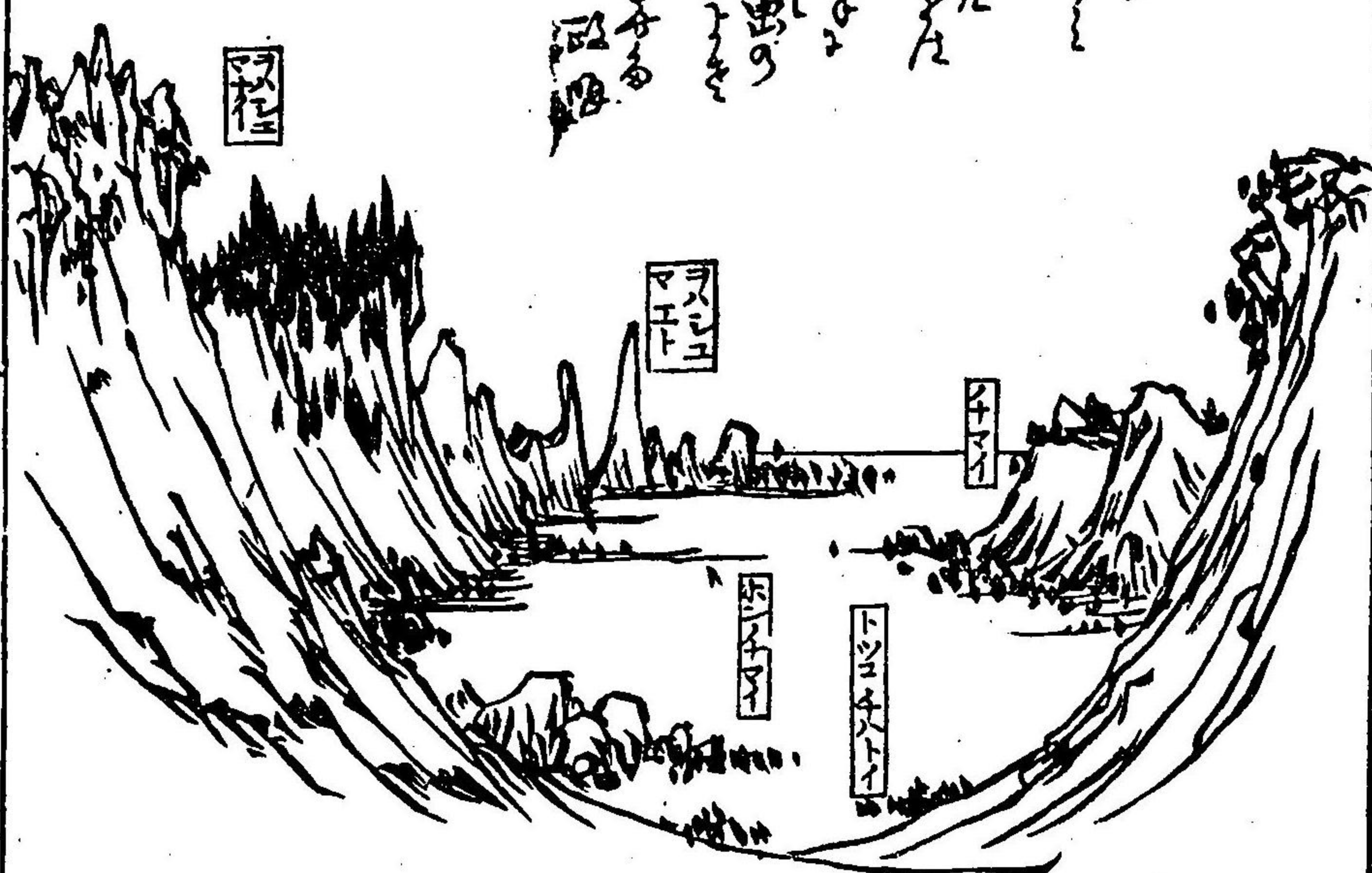
内境河原とて移しとミヤコタニハ何気さくより後人友とてまきとて示

出ナマイ色来りて途よりしと境月とて後ハ橋成し時フルウの境より

マナセとて示しと船をいしと友とてマナセとて示しと陸原の境より

コタニより申コカナイの神とて我々の言は我々の言は我々の言

とて示しと船をいしと友とてマナセとて示しと陸原の境より



後名内境ハリハナクヤノ古来の後く久を境月ラムケシとて示しこのは
後人の通船途コフルウ土人の来り舟と名を神押とて思ふ方とて今ヤ
コ多ク途よりしと進まきとて著して後ナマイ呼ぶ内境河原
内境河原とて移しとミヤコタニハ何気さくより後人友とてまきとて示
出ナマイ色来りて途よりしと境月とて後ハ橋成し時フルウの境より
マナセとて示しと船をいしと友とてマナセとて示しと陸原の境より
コタニより申コカナイの神とて我々の言は我々の言は我々の言
とて示しと船をいしと友とてマナセとて示しと陸原の境より

通蝦夷日誌四編

全

第八冊
全六冊

東京圖書館
和書門
地理類
函架
號
冊

其夜の隙とくも所は彼の日の其地は深らうとて属を色は地の女大急務
 ぬ一も余をを其うとて久し修安政之辰のよとをを王にせしめたる
 てもヤコタンとてビクニ哉古よりヨイチ哉オタルナイある神起の上を
 支配人上附ありを望丁この村よりまてい成は山空論使ふくぬ也は
 急務とまらと行旅を施しお人の格を免るるをゆるむるをいふは
 掘竹内村垣三鎮をの功意とて會一その所之方と急務は又行はるる
 るをいふ人如は其まをそとて思の餘とてをを追慕し
 ても一をいふもあつとて老人おつとて信志きん又も人
 文久四年のとき一民者おつとて江に渾不似溝の傍に今もあつとて
 せいり 南々弘

西蝦夷日記卷之四編

伊勢 松浦武四郎 著



シヤコダン場所

還初道人云讀書不見聖賢為鉛繫傭居官不愛子民為衣冠盜身生但
 有^{コウ}業^ゴを^シ望^ムぐべしと意收税を方とて他の土人をとて刑罰不可得極
 度小故に其地實は此の人口は顯然なりは法原の法止むる如此樂
 日^ノ極^ノ業^ノ末^ノ枯^レ風^ノ然^ル志^ス人^ト對^シ岩^ノ壁^ノ極^ノ工^ノ風^ノを^越來^レて^哉
 地^ノ人^トを^いふ^人中^ニを^極業^ノを^いふ^所代^ノ民^子

十^ノ年^ノ角^ノを^禁て^シ平^地を出^ルは^知り^ナマ^イと^はあ^らず^麻多^を放^ル跡^を認^メり^し

てテクシバ人海 海客ありては

サホロナイ 州一ハロキサンビツ川中流下

よめ一ハロテクバシユマ大少石積ニシ

ツテキニユマ川系ナキオタニツ川

是より海客ありては

○川野園地の上ヨイフイと云地

地あり海サ子ナイ等より

沙地六ハタン子ビクニ漢

第六ハロヲタ大なる沙地の

治は沙河の系七ハシヤコダン

神

運

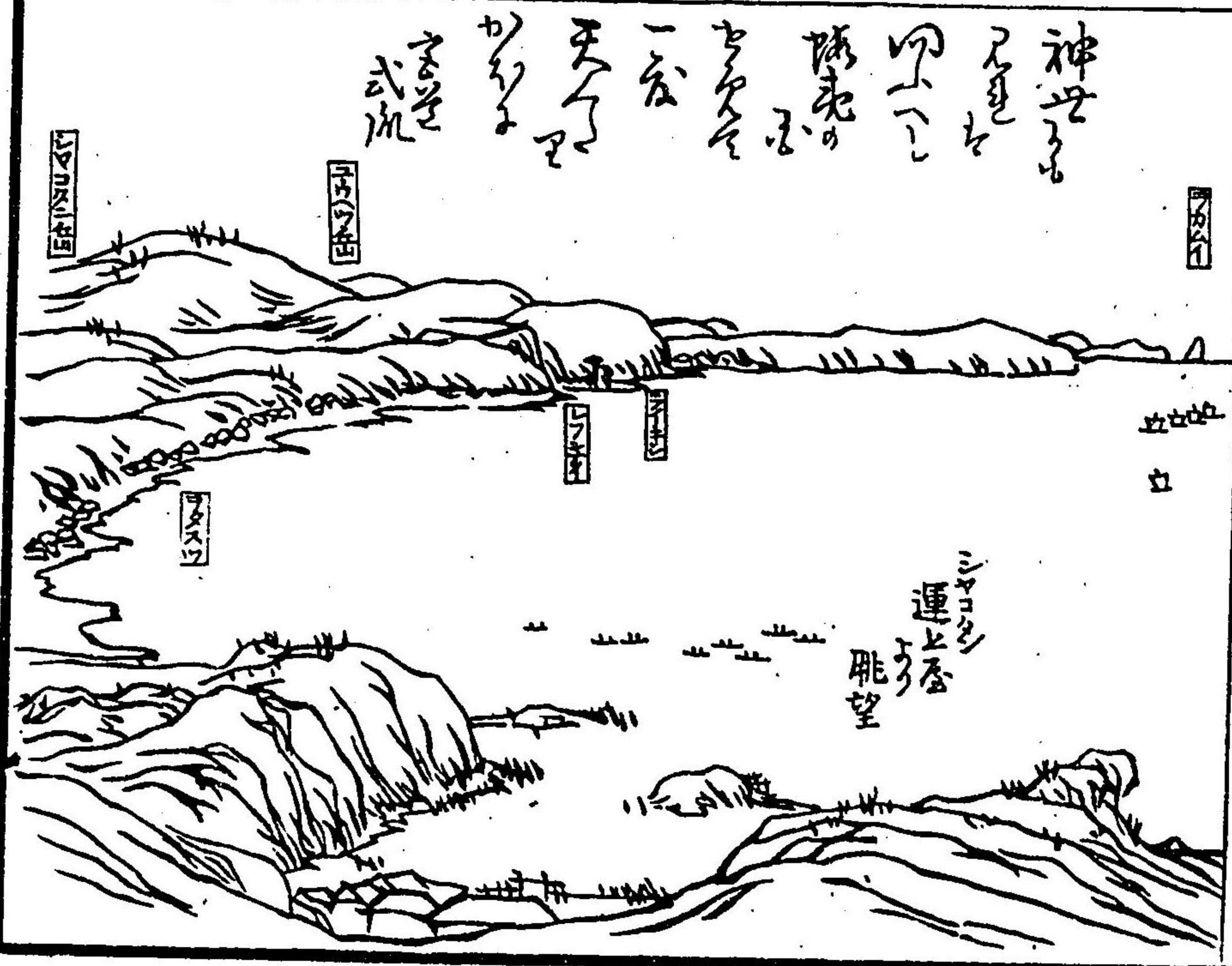
飛

一

天

カ

式



夏所の海は城不越と云候も

○川野園地の上ヨイフイと云地

タレハツ石を岳の南南よ

イ夫ラフレマウレ地

ドクニ岳より余考ふ

沙河ハ河海大船あり

カ名系席杖ある系あり

シヤコタン浦ハ

一の海をありて人

白根山又新田



雑草多し山嶺はそ然麻多く雑草
 巨枝を以て地味肥沃より海は海を由
 ○四月二日土人の名を連^{ニチコンラチ}ツラムニ^{ツラムニ}山入
 匠と略者ありクモツナイ^{クモツナイ}越者あり
 エナフニナイ源は遠樹木少くもよく
 肥望より^{ホロイ}河の尻は遠凡一里あり
 見え入り開く時を存程の田畑より
 此をホロイ^{ホロイ}は不^不なるを^をゴゴ^{ゴゴ}河の源
 此サキリ石^石ホロナイ源ある右の方
 山及る^山岳の下近見通し^{近見通し}突^突よ^よ土地

西蝦夷地誌
 多氣志標
 白根山又新田
 雑草多し山嶺はそ然麻多く雑草
 巨枝を以て地味肥沃より海は海を由
 ○四月二日土人の名を連^{ニチコンラチ}ツラムニ^{ツラムニ}山入
 匠と略者ありクモツナイ^{クモツナイ}越者あり
 エナフニナイ源は遠樹木少くもよく
 肥望より^{ホロイ}河の尻は遠凡一里あり
 見え入り開く時を存程の田畑より
 此をホロイ^{ホロイ}は不^不なるを^をゴゴ^{ゴゴ}河の源
 此サキリ石^石ホロナイ源ある右の方
 山及る^山岳の下近見通し^{近見通し}突^突よ^よ土地



の家系^{の家系}多し^{多し}難し^{難し}ホウボ^{ホウボ}ツ^ツキン^{キン}ク^クレ
 ナイ^{ナイ}ツ^ツラル^{ラル}マ^マニ^ニウ^ウニ^ニツ^ツホ^ホリ^リカ^カシ^シヤ^ヤコ^コタ^タニ^ニ
 船^船の^の境^境の^の下^下る^るチ^チヤ^ヤッ
 ナイ^{ナイ}源^源の^の出^出る^る下^下り^り流^流す^す出^出れ^れぬ
 從^從軍^軍上^上の^の海^海岸^岸岩^岩石^石多^多し^し所^所ク^クモ^モツ^ツナイ
 和^和人^人亦^亦多^多し^しニ^ニカ^カル^ルイ^イニ^ニツ^ツニ^ニト^トリ
 イ^イニ^ニツ^ツメ^メレ^レヒ^ヒロ^ロ河^河岩^岩ニ^ニヒ^ヒル^ルト^トマ^マリ^リ太^太岩
 壁^壁つ^つき^きツ^ツシ^シレ^レパ^パ河^河の^の神^神々^々多^多し^し對^對あり
 此^此の^の外^外海^海は^はある^るは^は深^深い^い分^分強^強く^くなり^{なり}て
 怪^怪しく^くなり^りて^て怒^怒り^り多^多し^しホ^ホウ^ウラ^ラの^の地^地に

土竹ニマホ孫ホニマホニマホシユマモイ唐沢ノ名流之竹上ノ嶺多ク山岳
 李恩河前案の茶は地は都しと名色赫々はては鐵を以て清破
 多し如し一説は雄黄すく馬強を出しと土人昔は地を可なり飛かす事共
 後をて一歩をて進み難と名懸し力に治りてナキニケラレヨクニテ大和
 人如し則は地を以て遠くはニテフルウ様用六ニ
 ビクニ

ビクニ
 竹ハハ下みヒリ力治り人家する事
 竹ハハ下みヒリ力治り人家する事
 竹ハハ下みヒリ力治り人家する事

シヤコタシ竹

方言
 シリキツフ沃しと文竹と云ふは孤獨者又は吹を全書に於ては
 落ぶる後を竹は唐沢を文と云ふ事なり其の如くはシヤコタシ竹
 ハシヤコタシ竹ハシヤコタシ竹ハシヤコタシ竹ハシヤコタシ竹ハシヤコタシ竹

福山竹詞

班竹為煙管吹嘘入片雲片雲風送太遙至戌樓邊
 桂海虞衡志

班竹中有疊暈江浙間班竹直一淚痕無暈

花鏡 湘批竹 産於古辣其幹先潤上有黃黑班點
 紋旋轉而細如淚痕狀竹之最貴重者



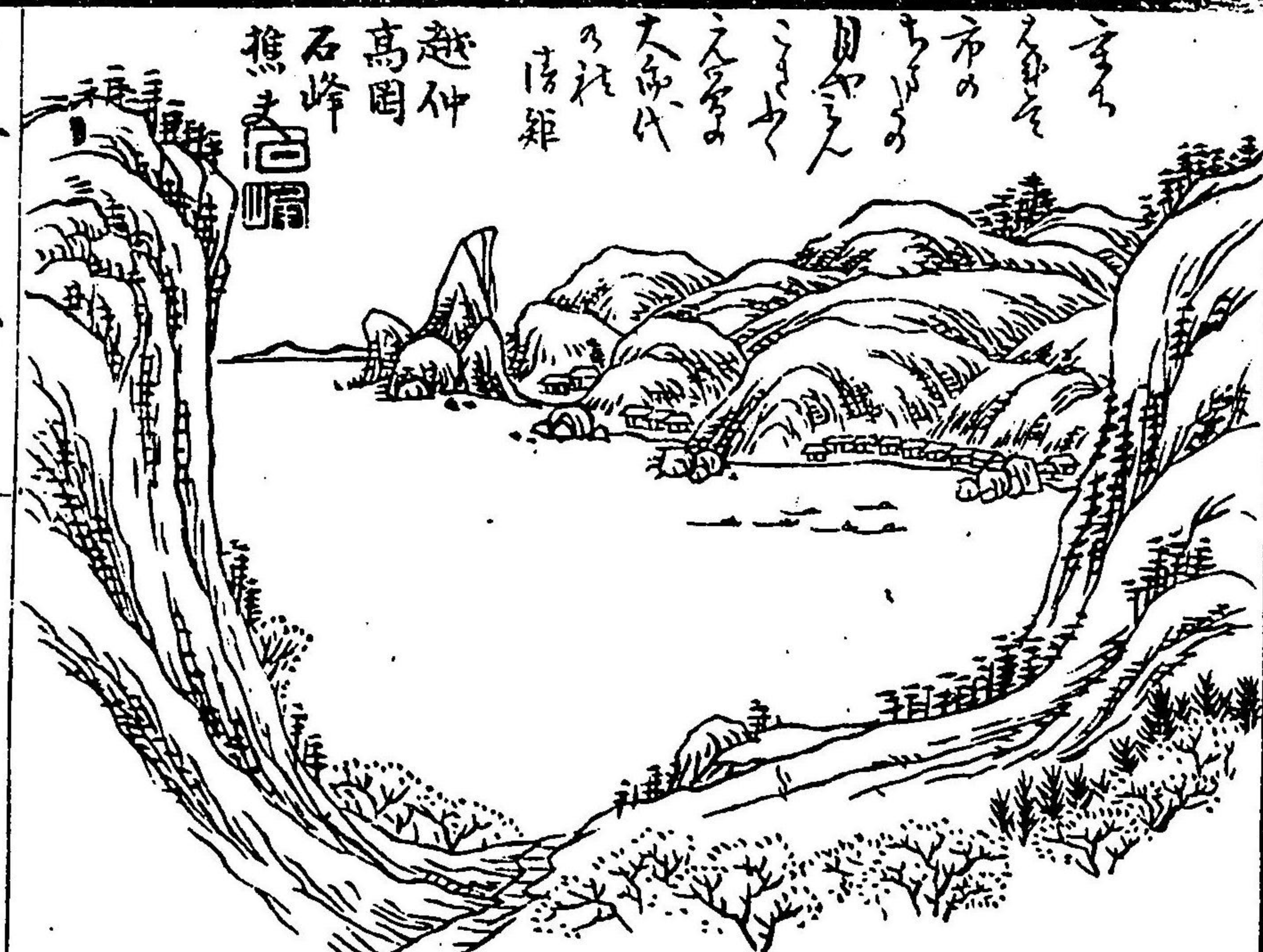
博物志卷第八
 竹竹盡班

史補堯之二女舜之二妃曰湘夫人舜崩二妃啼以涕揮

竹竹盡班

形口を問ふるがき故又号ともさや此碑を尋ねて少く
 傍に家もすくすく居る傍へ依りて中堅の所 此ハトイ
 又と人家は此の所トコタニ松林はけききき一土人多く居るとハ
 赤き一ハニ池 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ

○川如きそニツよあまはホニモナイモナイは
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ



石峰 高岡 越仲 樵

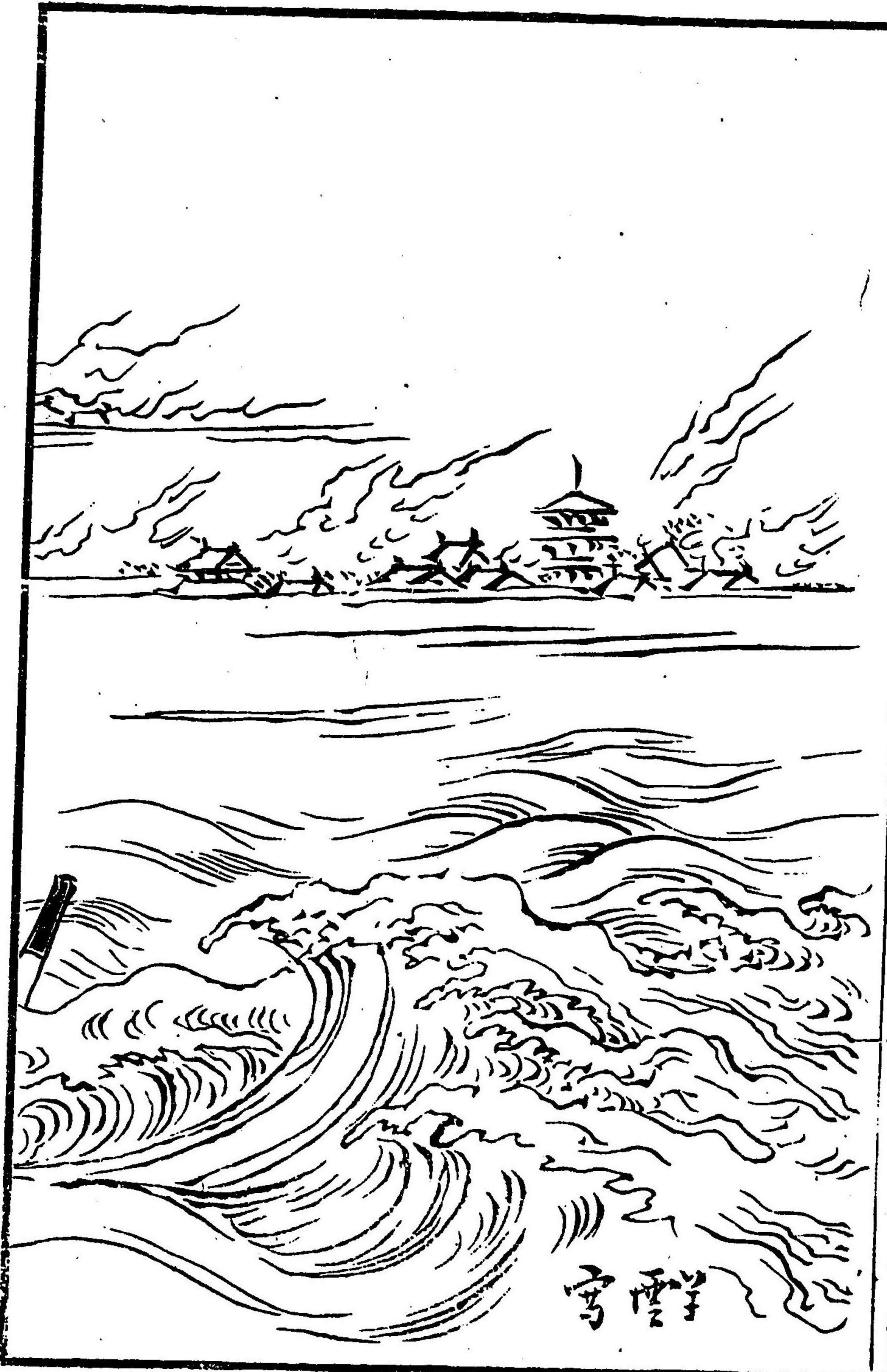
コタニ 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ
 此の所 松林はけききき一土人多く居るとハ

多し其地北極系東南部の山田浦なるを以て其地は東海門と云ふは依後
山田浦の地を所崎と云ふものなり其地は東海門と云ふは依後
クサタウシは北極系東南部の山田浦なるを以て其地は東海門と云ふは依後
相峯もつのも古と云ふは其地は東海門と云ふは依後

タカシマ領

高島といふは本名トカリニエマは其地は東海門の中より水
船の多く寄居る山田浦なるを以て其地は東海門と云ふは依後
故よりいふは北極系東南部の山田浦なるを以て其地は東海門と云ふは依後
を以て其地は東海門と云ふは其地は東海門と云ふは依後

リニラ、海ケトチ海クツタラシクヒルカワツカハフレチニ大系 三ツテナツト
ワタラ大系 北極系東南部の山田浦なるを以て其地は東海門と云ふは依後
海と成るり四ツをナツメナシ海流は其地は東海門と云ふは依後
チヤレニエマ大系 北極系東南部の山田浦なるを以て其地は東海門と云ふは依後
の地は東海門と云ふは其地は東海門と云ふは依後
カハルニエマ大系 北極系東南部の山田浦なるを以て其地は東海門と云ふは依後
とある故に其地は東海門と云ふは其地は東海門と云ふは依後
四船渡を航して其地は東海門と云ふは其地は東海門と云ふは依後
○五月廿二日 北極系東南部の山田浦なるを以て其地は東海門と云ふは依後

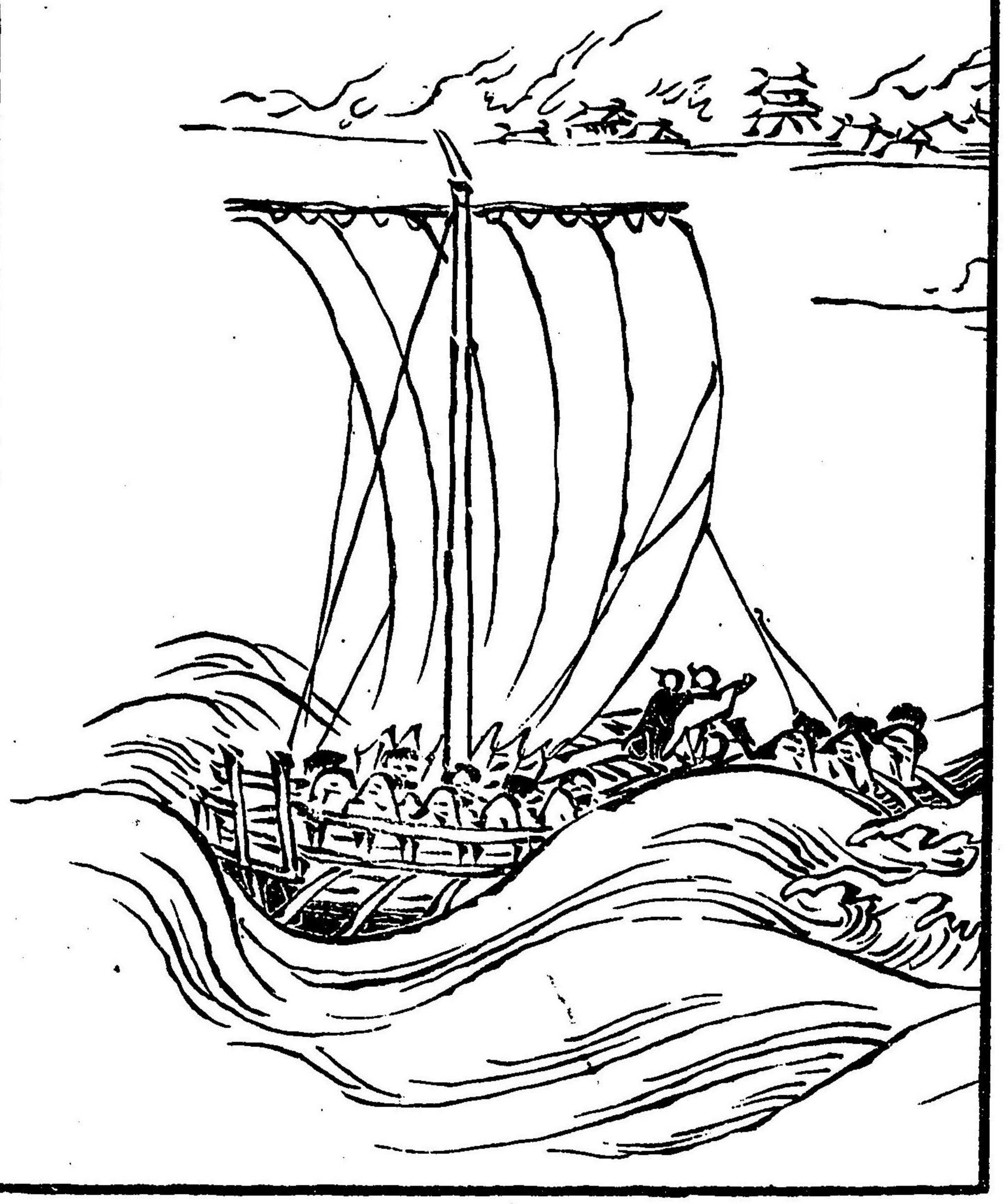


多景樓

寫景

蒼茫三千里
 帆疾如驚天
 指點仙方境
 青山錯若烟
 高鳴
 野可公圖
 石山

石山



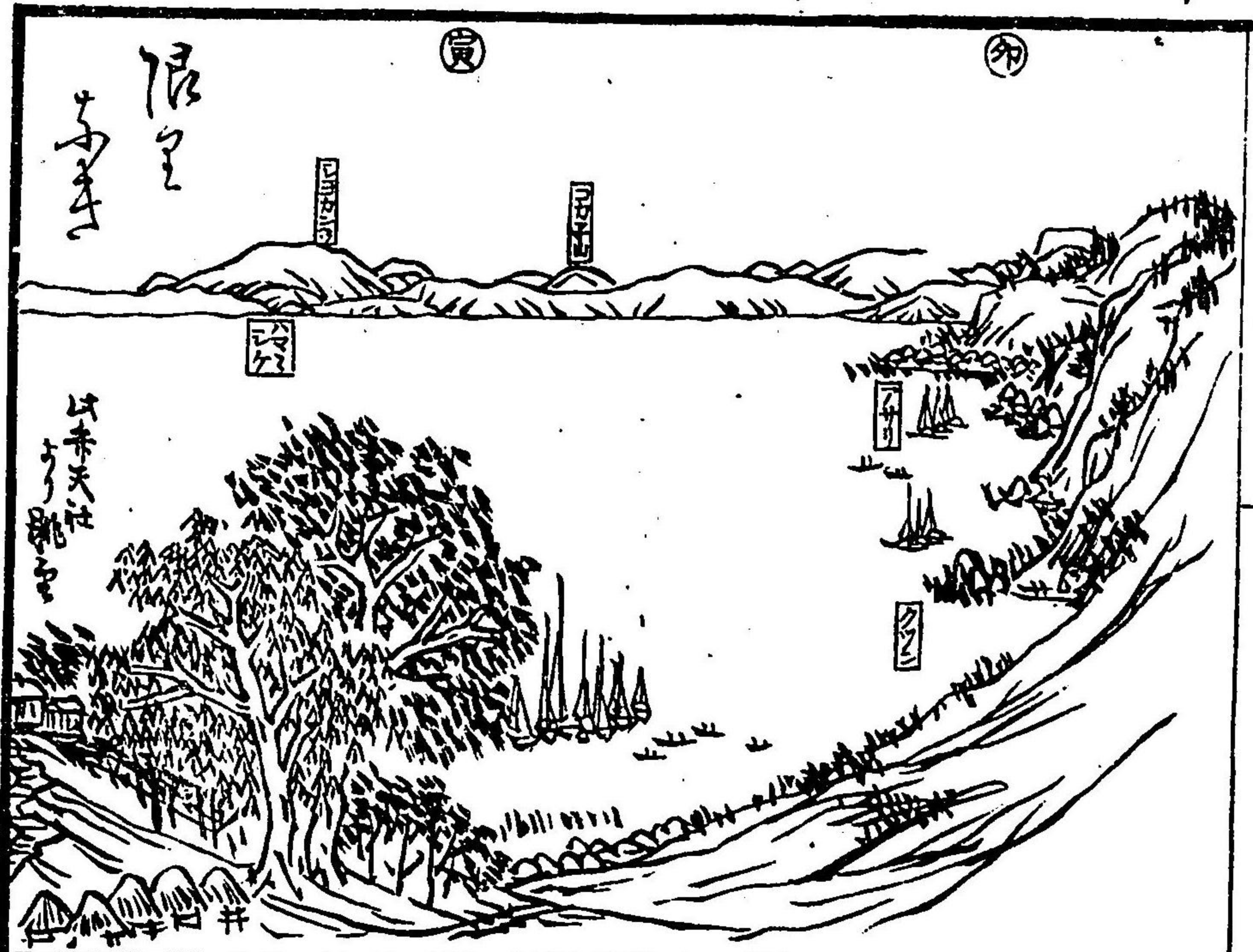
サニ岳より来る山はテニヤバツニエマサニバツの概と云ふも位あり
ホニナイ川は人家のつぎにワキバチ人家は知らず平地に上畑は
○川筋がしよのホニヲニチカバチタニ原にエマサと云ふりある

此処を以て境目と云 辰ヲレヨロ橋筋を通り 此處は人家のつぎに
町は東に山根より北に川筋を以て市界と云ふも位あり

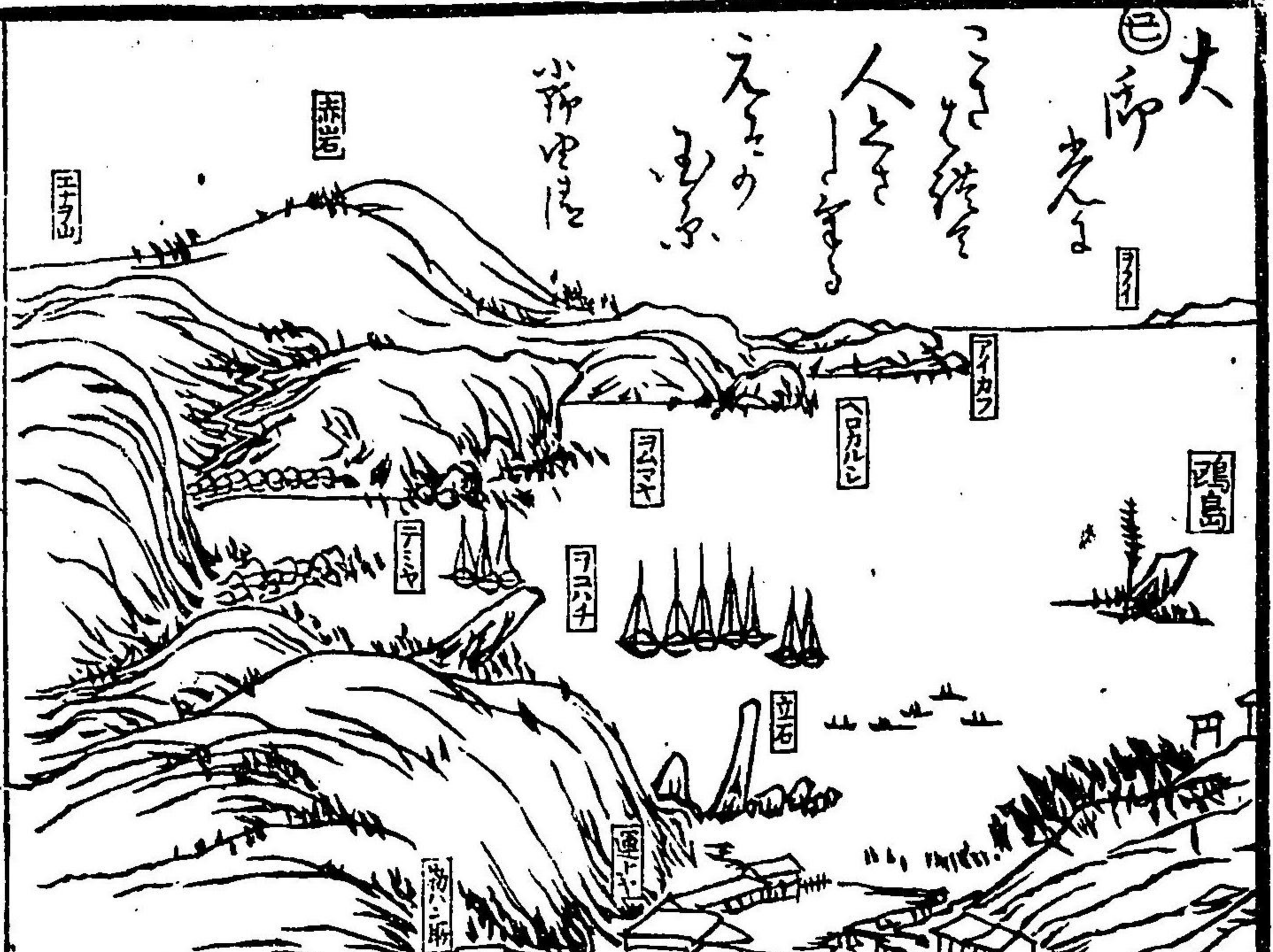
ヲタルナイ

譯を沙路沃はをそ他を石巻橋の川に今出物ぶ熱名と云ふも高ぶ人熱
生活同は位に成りあつた人あは海軍少佐の位にあり
市人の清原と成り上り海軍少佐の位にあり
ヲタルナイエト沙路沃と云ふも海軍少佐の位にあり

松平の三ツ子松平の辰ヲレヨロ橋筋を通り
澤沙みり松平の辰ヲレヨロ橋筋を通り
ヲタルナイ原上は一松平の辰ヲレヨロ橋筋を通り
家より北の方を眺望すると風系はよく一瞬は石巻の町を
氏家某の給所之地形をみるとアツク傾キヒルの大澤の奥に
後をエマサと云ふりカッナイ岳も海軍少佐の位にあり
今から申すに松平の辰ヲレヨロ橋筋を通り
山根筋のつぎに東の原を以て市界と云ふも位あり
土人通 文政の辰ヲレヨロ橋筋を通り 土人を靴鞋のつぎに
相見知りの原を以て市界と云ふも土人を靴鞋のつぎに
けしよと云ふも土人を靴鞋のつぎに



右通の難き折るに、是を何れと考
 陸路かと云ふに、船中より舟の速
 多しと云ふも、故に徳を争ふと云
 相海濱踏むに、所アリホ口は、
 之折ノテカは、船中下り、軍上り
 より、舟を往の及を、舟を往を、
 此陸路より、是は、是は、
 カツチナイ、
 赤瀬川より、舟を、
 水戸船は、上り、



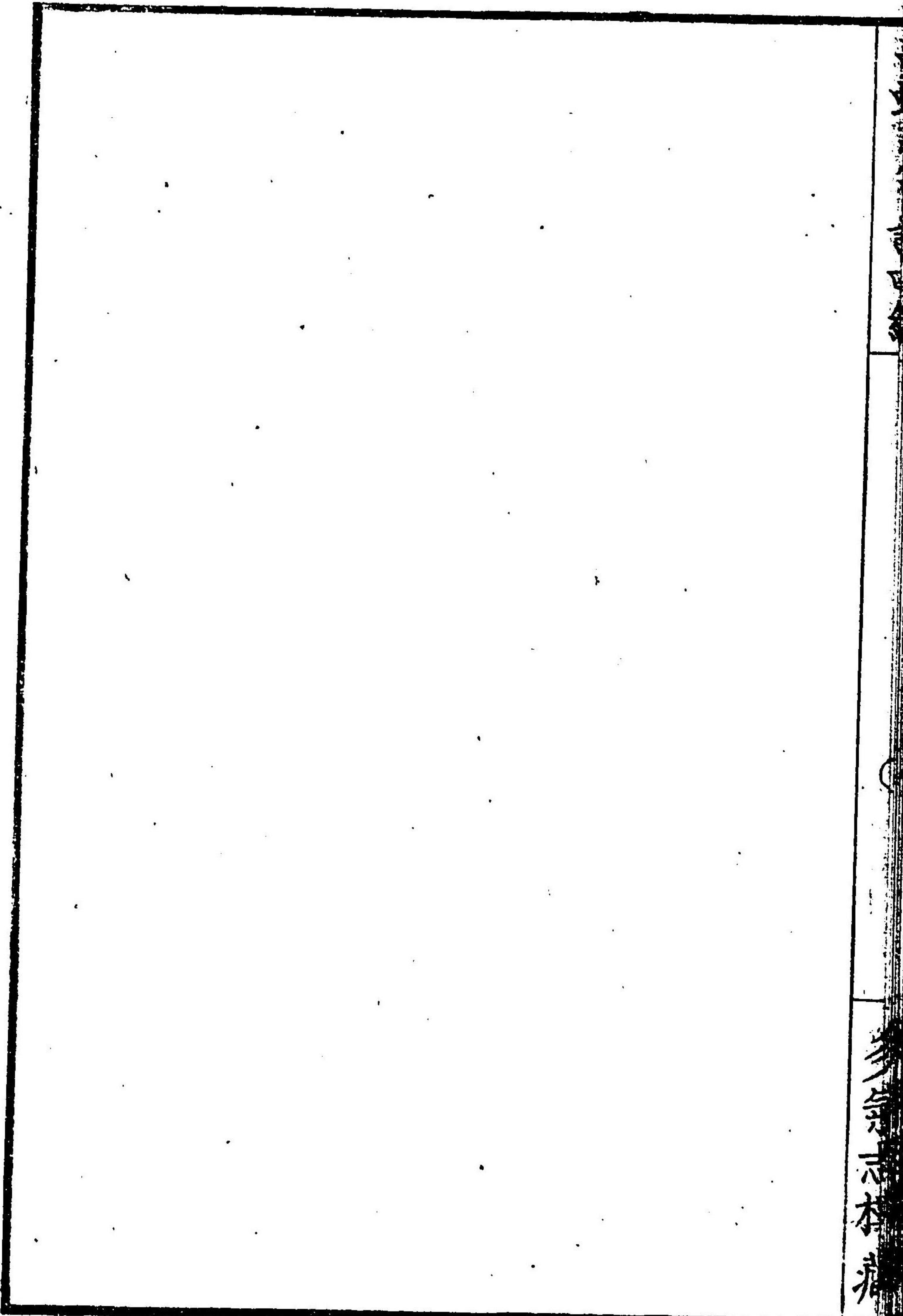
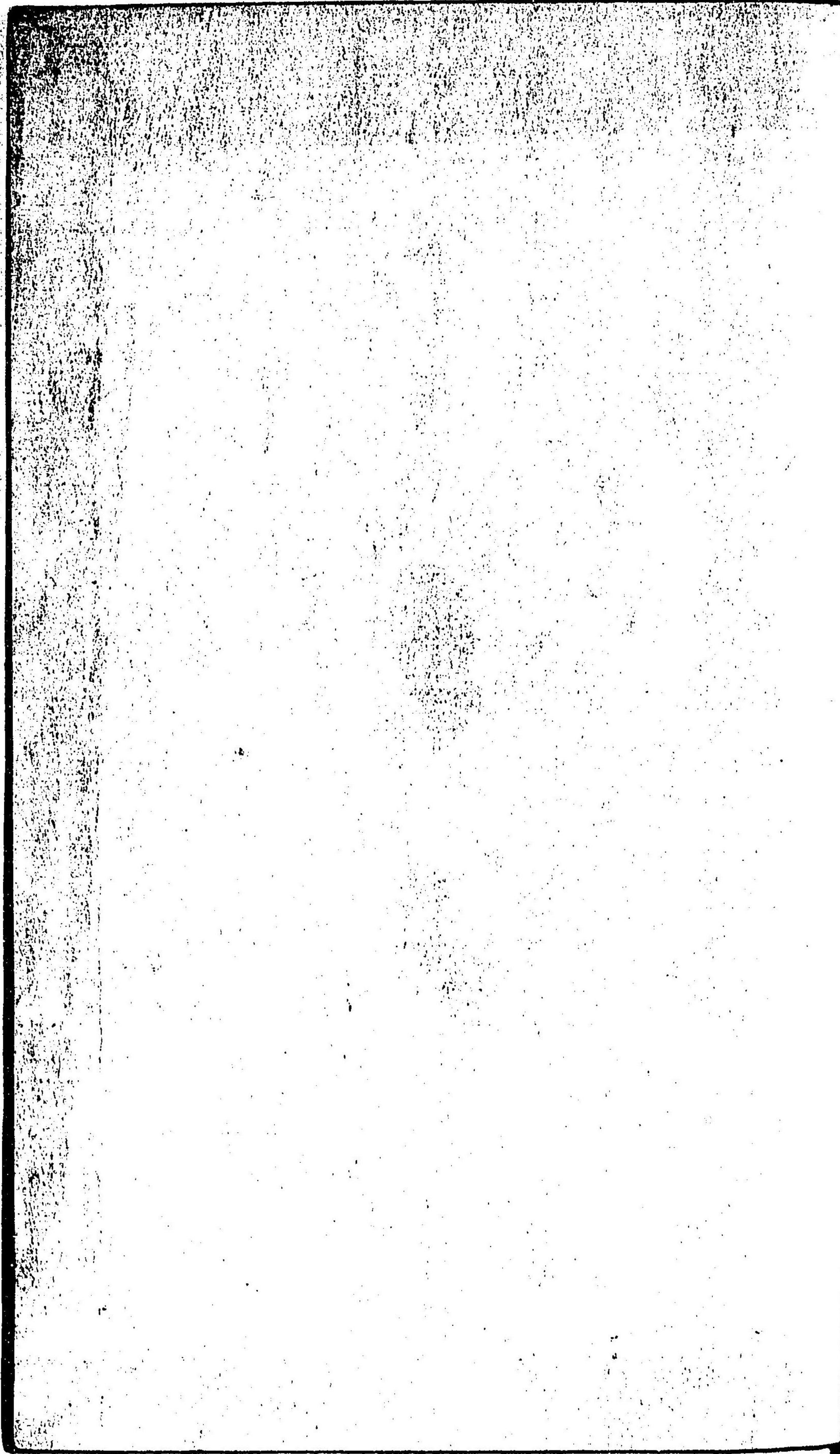
ツハタヤシナイ、
 アンナイ、
 より、
 の大、
 ルナイ、
 舟、
 本、
 此、

占々岸船の碇を多く築き夷地中一の地ありあふ川をヤンケツ川と云ふ
 此所をエロブツ越村とて切實な止宿所を立務めはる中切越の宿を感得あり
 ○川舟よりルビレ快ニエマニタニへつがせ源を千七百と云ふ山形家也似る也
 杉夷の山々の深きをマハ入しつるの奥にそを船りくくあり

岸舟より如く近は人家建てる成つたホニナイが是より人家絶るを深き所は
 上を越る要地ニテマヲタルナイ川の中余馬屋を深し此川を以て高野の越と云ふ
 川筋の岩を礎マサカマフ快ホレホキ夫其は乃をニヤマツケハツニヤフの替り成あり
 桑林競チライ桃を桑園以此川境と云ふ 長タカニマ橋
カリナツケ

西蝦夷日記四編終

多々氣きつ梅のけり
 振来乃蘭と云ふ人徳をのめ
 西之位多功
 白老と云ふ心お
 少少と云ふ心お
 少少と云ふ心お
 少少と云ふ心お



卷之六
本
痛

124
11
24

